

令和8年度 第1回 伊予市学校適正規模・適正配置等審議会 議事録

開催日時:令和8年6月30日(火) 19:00～

開催場所:伊予市役所4階 大会議室

出席委員:10名 (欠席2名)

傍聴者:1名

1 開会

2 委員委嘱、任命

3 教育長挨拶

4 委員自己紹介

5 会長、副会長選出

6 諮問

7 議題

(1)伊予市学校適正規模・適正配置審議会について

(2)伊予市の現状について

(3)国・県の動向、基本的な考え方について

(4)その他

(事務局)

－事務局より議題説明－

本審議会の設置背景、目的、および今後のスケジュール(※資料1)について説明。

市内小中学校の児童生徒数の推移や現状、将来見通し(※資料2)および国が示する適正規模の基準(※資料3)について説明。

(会長)

事務局からの説明について質問や意見等はないか。

(委員)

「学校の適正規模・適正配置」について冒頭でご説明があったが、これは伊予市内全域を対象として統一的に進めていく方針なのか。

私自身が感じている懸念点として、各地域や学校にはそれぞれ独自の事情があると考えている。旧伊予市や南伊予、あるいは双海や中山といった地域ごとに特性があり、置かれている環境も様々であり、統計上、数年後には児童生徒数が大幅に減少し、教育活動の維持が困難になるという予測があることは理解している。しかし、この適正規模・適正配置の議論を進めるにあたり、市全体で統一的な基準に基づいて画一的に進めていくのか、あるいは地域ごと、あるいは学校ごとに検討の場を設け、それぞれの地域の課題を丁寧に抽出した上で、適正な手法を見出していくのか、その進め方が非常に気になっている。

この点について、どのようにお考えか伺いたい。

(会長)

伊予市で平均的な統一の基準で考えるのか、地区の事情を勘案した形で考えられるのかということだと思うが、事務局から回答をお願いしたい。

(事務局)

適正規模・適正配置については、これまでも議会や教育委員会、総合教育会議等において議論を

重ねてきた。

その中で、「地域ごとの事情をどう考慮するのか」や「児童生徒数が何人を下回ったら統合の対象となるのか」といったご質問を数多くいただいている。これについて事務局として、一律の人数基準を設ける考えはない。

地域性や立地条件、あるいは各学校の歴史といった背景があることは重々承知しており、各学校の実情を踏まえた検討が必要であるという認識である。しかし、個別の事情にのみ固執してしまうと、結果として長期間議論を重ねたにもかかわらず、何も前進せず現状維持にとどまってしまうという事態も懸念される。先ほど説明させていただいたような現状の課題を踏まえると、それは避けるべきであると考えている。

そのため、各地域の特性を十分に考慮しつつも、伊予市全体として、最終的にどのような学校運営体制を目指すべきなのかという視点で、検討を進めていく必要があると考えている。

皆様にはそれぞれの地域のお立場からご意見をいただいているかと思う。そうした現場の声は大変貴重であるため、ぜひ参考にさせていただきたいと考えている。

数字の基準に縛られることなく、将来を見据えた最適な学校のあり方について、忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げます。

(会長)

適正規模適正配置というのは少し捉えにくい内容だが、各学校の個別事情等を十分に勘案しつつ、伊予市全体としてどのような方向性が望ましいのかを、皆様とともに作り上げていくものと理解している。

ここには、いわゆる『この数値を基準にする』といった画一的な正解があるわけではなく、各地域の学校が持つ特徴を尊重しつつ、子どもたちにとってより良い学校環境とは何かという観点から、それぞれの地域における最適解をこれから模索し、作り上げていくものだと考えている。

本日は第1回目ということも、その辺のことも踏まえ、意見交換に入りたいと思うがよろしいか。

－委員一同同意－

8意見交換

(会長)

それでは委員の皆さんに感想やご意見をうかがいたい。

(委員)

説明いただいた学校の適正規模・適正配置の国の基準や考え方で、小規模校のメリットや課題が示されたが、まさにその通りだと実感している。

現在、私が関係している生徒数21名の学校では、日々厳しい現状を感じている。例えば環境面では、人手不足により学校内の清掃が行き届かないことや、雑草の処理など、手が回らない箇所が多々ある。昨年度からコミュニティ・スクールの協力を得て改善されたところもあるが、それでも維持は非常に厳しい状況である。

また、生徒会活動や委員会活動、学校行事の運営などは、生徒が主体となって進める部分で、21名という少人数では、一人の生徒がいくつもの役割を兼務しなければならない。生徒の成長につながる側面もあるが、放課後の行事準備に追われて部活動の練習に参加できないといった弊害も生じている。

私が所属する中山中学校は、非常に良い環境であり、ぜひ存続させていきたいという思いもある。しかし、この人数規模で教育活動を維持していくことには、限界を感じている部分もあり、非常に悩ましい。

(会長)

学校現場が非常に厳しい状況にあるという点は、確かに感じている。

一方で、現在コミュニティ・スクールという枠組みを通じて、地域の方々が学校にどのように関わっていくか、その連携のあり方が広がりつつあるとも認識している。

小規模校における集団生活の難しさという課題は依然として存在するものの、地域の方々の多様な価値観に触れ、経験を積む機会という点については、コミュニティ・スクールという仕組みがうまく機能すれば、ある程度補完できるのではないかと思う。

(委員)

北山崎地区では昨年度からコミュニティ・スクールに取り組んでいるが、現状を申し上げると、保護者の皆様も共働きの方が多く、平日の学校行事への参加が難しいという意見が上がっている。そうした不参加の部分を補うために、地域の方々のご協力を仰いだり、あるいは区長会を通じてお願いをしたりして連携を図っているところである。

私自身も、学校行事の際の交通整理等を担当しているが、車両の誘導一つをとっても、かなりの人員と時間を要する。さらに負担が増えることになれば、駐車場の確保や交通整理の問題がより深刻化することが予想される。そうした事情を考慮すると、北山崎地区としては、できれば現状の体制を維持しながら運営していきたいという意向もある。

地域全体で子どもを守っていく時代になっており、区長会としてもそのような認識で動いているので、地域の実情を十分に踏まえた上で、この適正規模・適正配置の問題について解決策を検討していただきたいと思う。

(会長)

コミュニティ・スクールといいながら、実態としては地域の力に頼らざるを得ない。一方で、地域そのものの学校に関わる力が少しずつ弱まってきているという側面もあるかと思う。

そうした現状を十分に勘案し、今後、地域の皆さんの力をどのように結集し、活用していけばいいのか。そのあたりのバランスや可能性についても、検討していかなければならないと感じた。

(委員)

統計的に見れば、将来的に児童生徒数が減少し、学校の統廃合が避けられない時期が来ることは理解している。今後、具体的にはいつからどのようなスケジュールで、どこどこが統合され、最終的にどのような学校配置を目指していくか検討していくのだと思う。

以前、私も地域の一員として、地元の小学校が統廃合したのを経験した。学校がなくなったことで、その地域は非常に寂しくなった。

例えば、閉校前の運動会では児童が少ないため、公民館の運動会を兼ね地域住民と交流し、賑わいもあった。しかし、学校の閉校とともにそうした行事も徐々に失われ、地域全体の活気が減退してしまっていると感じている。

地域の中には『やはり残しておけばよかった』という声があるのも事実である。

とはいえ、物理的に児童がいなくなれば学校の維持は困難であり、児童がわずか数名という環境が、果たして本来の学校教育と言えるのかという議論は必ず出る。また、地域の住民や保護者の皆様の意見も様々であると思う。今の生活圏を維持したいという方と、教育環境を優先して他地区へ通わせたいという方など、そのバランスを取ることは極めて難しいと感じている。

学校を残したいという声と、統合が必要だという声、双方の主張が出ることは避けられないと思うが、今後は通学区域の再編なども議論の対象となってくる。特定の地域同士を統合するような具体的な検討を始めれば、住民の皆様の様々な思いや懸念が出てくる。

学校の場所や通学区域のあり方といった物理的な制約をどこまで見直せるのか、また変えられな

いのかといった点を含め、『学校の適正規模・適正配置』を改めて熟考すべき時期に来ていると感じている。こうした点を考えつつ、今後も意見をまとめていきたい。

(会長)

新しいルールを構築できるかどうかという事もある。

学校が廃校となれば、地域の方々が寂しさを感じる。一方で、現在、廃校となった校舎や跡地をどのように活用し、地域の活力は必要だが、地域を動かしていこうかという動きが、各地で生まれ始めていることも認識している。

そのような、廃校活用事例なども参考にしながら、学校がなくなることによる地域の寂しさをどのような形で補い、維持していけるのかについても併せて考えていかなければ、なかなか合意形成には至らないのではないかと感じた。

(委員)

私の地域の小学校では児童数が少なく、また、その前段階である保育園の園児数も減少している。そのため、3～4年前からは小学校と保育園で合同の運動会を開催するなど、連携した取り組みを始めた。

私自身の経験として、以前あった下灘中学校が双海中学校へ統合された際のことですが、結果として統合して良かったと感じている。やはり生徒数が増えることで友人が増えるという点は、子どもにとって最も大切なことだと思う。

建物等の施設面にも課題がある。下灘小学校は約10年前に建直したので綺麗なのですが、下灘保育園には耐震性に問題があると聞いている。そうした施設面も含めて考えていく必要があるのではないかと。

(会長)

建物の安全性のこと等も含めて考えていく必要もあると感じている。

(委員)

伊予中学校と伊予小学校の現状では、すぐに統廃合が必要という状況ではないと思っているが、保育所と幼稚園が認定こども園へ移行した過程を見ても、少子化が進行していると実感している。以前、伊予中学校を港南中学校へ統合するという議論があった際には、住民や保護者の方からの反対があり、現状の体制が維持されていると聞いたことがある。子どもたちにとって『母校』が存在することは非常に喜ばしいことなので、可能な限りその形を残すことが望ましいと思っている。しかし、現状のままでは教育活動の維持等が難しいということになれば、将来的な形を検討することも選択肢の一つとなると考えている。

ただ、現在、八倉地区の子どもたちは、小学校へ通うのにも約4キロメートルの道のりを一生懸命歩いて通学している。もし今後、他校との統合が検討されるのであれば、これまでの徒歩通学では対応できない。中学生であれば自転車通学も可能かもしれませんが、小学生では難しい。

統合を検討するにあたっては、通学手段の確保や、それに伴う補助制度の整備など、保護者が安心して子どもを通わせられる環境づくりについても考えていく必要があると思う。

(会長)

通学距離についてはスクールバスなどを使用する政策、また予算のこともあるのでその辺を考えていく必要がある。

(委員)

学校の適正な規模や配置について、国の基準が示すように、集団生活を通じた教育環境の重要性について理解はできる。

ただ、統廃合を実際に進めていくにあたっては、保護者や子どもたちの思いを何よりも大切にして進めてもらいたいと思っている。また、地域に魅力を感じて住み続けている方もいると思うので、そうした住民の皆様の思いなども考えてもらいたい。

（会長）

一人ひとりの思いも非常に大切であるが、それに添えるかというのはまた違う課題があると思う。今後含めて議論していきたいと思う。

（委員）

私たちは児童クラブの運営を伊予市より受託しているが、市からは『市内統一的な対応』を求められている。例えば、児童数が多い郡中地区と少ない中山地区とで、イベント実施数に極端な偏りが出ないよう、各地区で夏休み中の企画、運営をしている。また、保護者がお弁当を用意できない日に業者が配達する配食サービスについても、市のご意向を受け、地域によるサービスの格差が生じないよう、全地域で業者選定を進めている。

こうした経験から、市内におけるサービスの平準化や標準化を図るためには、統合も一つの選択肢として考える必要があるのではないかと感じている。

また、子どもたちの目線で考えると、少人数の環境では、例えば兄弟で利用している5名のうち3名が欠席すると、兄弟同士だけで過ごすこともある。家と同じ関わり方になると人間関係が発展しない側面がある。そうした教育的・発育的な視点に立てば、やはり多くの友人と関われる環境の方が良いのではないかと感じている。

（会長）

今の現状でいくと、子供同士が関わる作る機会をどう提供していくのかということも含めて、厳しい状況があると感じている。

（委員）

児童数は目に見えて減少しているが、昨年度から学校運営協議会が始まり、南山崎地区では適度に動いている。

長年勤務されていた校務員の方が代わった後は、管理が追いつかず、草が生い茂ってしまうといった状況があった。通学する子どもたちから『雨の日は草で濡れてしまう』といった声を聞いた。ちょうどこの協議会が始まって、昨年度に2回と、今年度に入ってから草引きの行事を実施した。その際、学校と関わりの薄くなった住民の方々や、現在はお子さんやお孫さんも学校に通っていない家庭の方々までが、地域の子どものためにと積極的に協力してくれるようになった。

また、コロナ禍により長らく途絶えていた夏祭りについても、今年からは若い保護者やPTAが中心となって再開した。

現時点では、地域一丸となって頑張っている。将来的に統廃合や複合施設化など、様々な検討が必要となる局面はあるかと思うが、今後、しっかりと学んでいきたいと考えている。

（会長）

すごく地域力がある地域。地域の協力が得られるというのはすごく良い環境だと思う。

将来のことも含めて、考えていけたらいいかと思う。

（委員）

皆様のご意見を伺い、この問題の難しさを改めて感じている。佐礼谷は非常に地域性の濃い場所。児童数が少ないことは何年も前から認識しているところ。20名程度児童がいた頃は、地域の

方々も『何とか学校を残そう』と保護者に声をかけていた。しかし、ここ最近では地域の方々から『いつまで頑張るの』と言われることも多くなった。

以前、統合を進めるべきかという議論が持ち上がった矢先にコロナ禍となり、当時は小規模校ゆえの『密にならない』という利点があり、他校よりも行事などが実施できたこともあって、保護者の間では『もう少し様子を見てよいのではないか』という意見になった。

しかし、コロナ禍が落ち着き、児童数が8名まで減少し、各学年ほぼ1名という状況になると、小規模校のメリットとして挙げられていることが、逆にデメリットとなる。例えば、広い教室を余裕をもって使えるが、掃除場所を何か所も受け持つなど、子どもたちだけでなく先生方の負担も非常に大きいと感じている。

また、資料にあった児童数の推移見込みを見ると2学年が0となる。そうになると養護の先生もいなくなる。現在12名を下回り教頭先生がいらない中、さらに養護教諭も不在になる可能性があると感じ、危機感を感じている。

統合を進めるとなれば、残された建物をどう活用するのか、学校がなくなることで地域が衰退してしまうのは良くないとも思っている。

今後は、学校の統合という話だけでなく、そうした跡地の利活用なども含め、地域・保護者・子どもたちのことを考えて慎重に話し合っていければと考えている。

(会長)

学校運営の観点から考えると、小規模校ゆえの難しさが存在する。特に佐礼谷地区のようにコミュニティが強い地域においては、学校跡地の利活用をどのように図るかという点も併せて考えていかなければ、議論が前に進まないのではないかと感じている。

また、現状の規模維持を前提とする考え方と、将来的にさらに児童数が減少した際、現行の学校運営体制を維持することが果たして可能なのかという点についても、改めて冷静に検討していく必要がある。今後、こうした視点も含めて議論を深めていければと思う。

今日は1回目なので、皆さんの忌憚のない意見を出していただいた。

この意見を集約しながら、どのような方向で考えていけば良いのか、2回目以降協議していきたい。

皆さんの思いも含めて、今後、活かせる形で審議会を進めけたらと思っている。

ここで意見交換については閉めさせていただく。

9 その他

－事務局より説明－

(1) 審議会の公開・非公開について

(2) 次回開催日程確認

10 閉会